



Title	日本語数量詞種別による意味用法の分析
Author(s)	張, 琴琴
Citation	国語国文研究, 162, 53(16)-34(35)
Issue Date	2024-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94583
Type	journal article
File Information	162_3.pdf



日本語数量詞種別による 意味用法の分析

張 琴 琴

1. はじめに

日本語の数量詞に関する研究は、1960年代後半から始まったと言われている。生成文法の研究における「数量詞遊離 (quantifier floating)」という現象の発見により、日本でも移動規則や派生関係の観点から日本語の数量詞に潜む遊離現象などが言語学者の間で活発に論じられてきた。しかし、現に連体数量詞文と遊離数量詞文の意味は異なり、移動説を認めない立場を取っているのが主である (加藤 1997, 2003 など)。そのため、本稿も数量詞遊離を認めない立場を取る。

これまでの研究において、「3 個」や「たくさん」のような数量詞を中心に議論されてきた。加藤 (2003) は存在数量と非存在数量に焦点を置き、特定数量詞と不特定数量詞の使用特徴と職能を詳しく分析している。しかし、数量詞の種類は多様であり、例えば、「3～5 個」、「数件」、「何人か」のような曖昧に数・量を表すものがどのような使用特徴や意味用法を持つか、先行研究ではほとんど注目されていない。そこで、日本語の数量詞の実態を体系的に把握するために、このような曖昧な数量表現も視野に入れて議論すべきだと考えている。したがって、本稿は張 (2024) の分類を踏まえて、特定数量詞、不特定数量詞、準特定数量詞が、それぞれ連用・連体数量詞文に置かれるときの意味用法を明らかにする。結果として、従来の数量詞とこれまで扱わなかった数量詞の種類を合わせて議論することは日本語の研究の発展に資するのではないかと考える。

本稿の構成は次の通りである。まず2節で数量詞の意味に関する先行研究を概観する。続いて3節では本稿で用いる概念を説明する。4節において特定数量詞の意味用法を考察する。次に5節では不特定数量詞について分析し、6節では準特定数量詞や複数の異なる数量詞を用いる文について詳しく述べる。最後に7節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

前述したように日本語は英語と同じく、文に置かれる数量詞を移動することで「数量詞遊離」という現象が見られると指摘されてきた。例文を以下に示す。

(1) 10 段ノ 階段 ヲ ノボル。

(2) 階段 ヲ 10 段 ノボル。

(以上、奥津 1983 : 79¹)

当時、奥津や神尾などの研究者は数量詞の移動説について積極的に分析を行った。しかしその後、井上 (1978)、加藤 (1997、2003) などは、移動された後の数量詞文と移動される前の文の意味が異なるという観点から、移動説を認めない立場を取っている。つまり、(1) は階段の全体的数量を表し、(2) では階段の総数が分からないが、そのうちの 10 段を登ると解釈できる。そして、数量詞遊離と格の関係について、主に主格と対格の間で生じ、それ以外の格ではほとんど生じないということがすでに解明されている。奥津は (1) を N ノ QC 型² とし、(2) を NCQ 型としているが、加藤 (2003) は前者を「連体数量詞文」、後者を「遊離数量詞文」としている。本稿では、日本語の修飾構造から前者を「連体数量詞文」、後者を「連用数量詞文」と呼ぶこととする³。

(3) 10 個のたまごを買った。 (連体数量詞文)

(4) たまごを 10 個買った。 (連用数量詞文)

(5) 1500 cc の乗用車を持っている。 (連体数量詞文)

(6) *乗用車を 1500 cc 持っている。 (連用数量詞文)

例文 (5) の「1500 cc」は車の数量を指しているのではなく、排気量を表す属性の一種である。数量を指す場合には、「車を 2 台持っている」のように、通常「台」を用いて数える。奥津 (1983) によると、「1500 cc」は属性 Q、「10 個」は数量 Q を表している。

さらに、数量詞の意味について、矢澤 (1985) は述部との関わりから「達成量」と「同時量」の 2 つに分けている。

(7) 学生ガ 5 人 橋ヲ 渡ル。

(矢澤 1985 : 104)

¹ 例文の句点は引用者による。また、本稿で挙げる用例のうち、出典の明記がないものは作例である。

² N (noun-名詞)、Q (quantifier-数量詞)、C (case-格助詞)。

³ 加藤 (2003) は、「副詞的数量詞」「連用数量詞」などの名称に比べてやや一般性が高いという考えから、派生そのものを想定しない立場をとりつつも「遊離数量詞」という用語を用いている。そして、Q-no-NC タイプの数量詞を「連体数量詞」と呼んでいる。確かに、多くの先行研究では、「花を 2 輪買った」のような文を遊離数量詞文、「2 輪」という数量詞を遊離数量詞で呼んでいる。そして、理解の便宜上、そのまま NCQ 型の文に対して遊離数量詞文という用語を用いた研究も多い。本稿では加藤 (2003) に倣わず、「遊離数量詞」や「遊離数量詞文」という用語の代わりに、

矢澤は、学生が橋を1人1人渡って5人に達したことを達成量とし、学生5人が一斉に橋を渡ることを同時量としている。奥津（1983）が提案した概念「属性」と矢澤（1985）が提案した概念「達成量」に対して、加藤（1997、2003）は非存在数量詞の視点から「属性」と「動作量」を二項対置的に設定した。具体例を以下に挙げる。

- (8) 120 m の釣り橋を歩く。
 - (9) 釣り橋を 120 m 歩く。
 - (10) 3 棟のビルを建てる。
 - (11) ビルを 3 棟建てる。
- （以上、加藤 2003：445-446）

加藤（2003）は「存在数量を表す数量詞」を存在数量詞⁴とし、そうでないものを一括して非存在数量詞と名づけている。例えば、(8)の「120 m」は釣り橋の長さを表しており、属性と見なすことができる。(9)は釣り橋の本数でなく、歩く距離を表しているため、動作量を指し示している。このように、(8)(9)の「120 m」は非存在数量詞となる。一方で、(10)(11)の「3 棟」はビルの数量を表しているため、存在数量詞に属する⁵。加藤（2003）は「個数」を表す数量詞を「存在数量詞」としており、存在数量詞を表す場合は、既定的単位と未定の単位であることを表すことを提案している。

以上のことから、本稿は奥津の「属性」と加藤の「動作量（矢澤の達成量とはほぼ同じ）」、「存在数量詞」、「非存在数量詞」、「既定的単位」、「未定の単位」という概念を採用し、特定数量詞・不特定数量詞・準特定数量詞が連体数量詞文と連用数量詞文における意味用法を明らかにする。

3. 本稿で用いる概念について

考察に入る前に、まず予備知識として本稿で使用する概念について説明しておく。ここでは、主に存在数量詞と非存在数量詞、既定的単位と未定の単位に分けて述べる。3.3 節において、本稿で新しく提案する準特定数量詞の位置づけを行う。

日本語の修飾節の構造関係から「連用数量詞」と「連用数量詞文」という用語を使用する。

⁴ 加藤（2003）によれば、存在数量とはそのものの数量に対して、「いくつあるか」ということである。例えば、バナナを3本買った。バナナの個数は「本」で数えるため、「3本」はバナナが存在数量となる。この場合は、「3本」は存在数量詞と称する。

⁵ (10)(11)の例について、加藤は「3棟」が「動作量」を表すとも解釈できそうであると指摘している（詳しくは加藤 2003 を参照されたい）。

3.1. 存在数量詞および非存在数量詞

本節において、前節で扱い切れていない意味的な側面の事実を整理する。主に加藤(2003)で提案された存在数量詞と非存在数量詞を見る。

(12) 3本のボールペンを買った。

(13) ボールペンを3本買った。

加藤(2003)によれば、(12)(13)の「3本」は存在数量を表す数量詞である。つまり、存在数量詞のことである。ここでは、連体数量詞文と連用数量詞文の両方が成立している。二つの文が表している意味はほとんど同じに見えるが、実際に語用論的視点から見た意味は少し異なっている。ここでは詳しく議論しないことにする。

(14) 10段の階段を登った。

(15) 階段を10段登った。 (以上、加藤 2003 : 442)

階段そのものの数を数えるとき、「2本の階段がある」のように一般には「箇所」、「本(ほん)」を使用する。つまり、「10段」は存在数量詞ではなく、非存在数量詞を表している。この場合では、連体数量詞文と連用数量詞文の両方が成立するが、それぞれの意味は異なる。奥津(1986)によれば、(14)は階段の属性を表しており、(15)は登った量を表している。しかし、非存在数量詞は常に連体数量詞文と連用数量詞文として成立するわけではない。例えば、以下のような例である。

(16) 800ワットの炊飯器を購入した。

(17) *炊飯器を800ワット購入した。

(18) *5時間の論文を書いた。

(19) 論文を5時間書いた。

(16)～(19)から見るように、非存在数量を表す場合に、連体数量詞文か連用数量詞文のいずれかしか成立しないことがわかる。(17)が連用修飾にならないのは、「800ワット」が、動作「購入した」の動作量として表せないからである。一方で、時間の長さを表す「5時間」は動作量として解釈できるが、存在数量ではないために、連体用法を用いることができない。

(20) 私は10人の知人に協力を打診した。

(21) *私は知人に協力を10人打診した。

ここでの「10人」は存在数量を表し、加藤(2003)によれば、存在数量を表す場合に、連体数量詞文と連用数量詞文の意味が対立している。しかし、(21)は自然な文にならない。考え方によって、(21)の「10人」は「打診した」動作量として解釈するこ

ともあるが、本稿では、構造上から数量詞遊離は二格で生じない点から、分析の対象から除外することにする。

3.2. 既定的単位と未定の単位

数量詞の意味的特徴を明らかにするためには、認知意味論の知見を借りて考えるのが有用である。本稿では加藤（1997、2003）にしたがって、数量詞の意味用法を整理する。加藤（1997）は、数量詞が連体修飾と連用修飾における意味が異なる点から、数量詞が存在数量を表すときに、「集合的認知」（連体修飾で用いられる場合）と「離散的認知」（連用修飾で用いられる場合）という対立的な関係があることを指摘している。そして、用語を厳密に定義するために、加藤（2003）は前者を「既定的単位」、後者を「未定の単位」と呼びなおすことにしている。

(22) *「5 個のリンゴがほしいんですが」

(23) 「リンゴが5 個ほしいんですが」 (以上、加藤 2003 : 454)

(22) (23) は単なる文として何の問題なく成立できるが、青果店へ買い物に行った場合、連体数量詞文を用いた (22) は不自然な発話となる。店頭に5 個入りのリンゴが売られている情報を発話者と聞き手が共有している場合は、「5 個のリンゴ」と発話しても不適格ではない。しかし、共有していなければ、店の人が客の発話の意味を理解できず聞き返すということはある（加藤 2003 : 455）。このように、相手に突然5 個入りのリンゴを指して言うには不適格である。この現象について、加藤（2003 : 455）は、「このことは、連体数量詞が一種の集合として捉えられた「5 個のリンゴ」を指すのに対し、遊離数量詞はまとまりあるものと見なされていないリンゴの個数が5 個であることを表していることと本質的な関連を持っている。つまり、連体数量詞が使われる場合は「まとまりのあるもの」と見なしているのであり、そうでない場合は遊離数量詞が用いられると一般化できる。「まとまりのあるものと見なす」には、それが談話の運用上適切でなければならない」と指摘している。

(24) 3 個のプリンを買った。

(25) プリンを3 個買った。

スーパーやコンビニでは、ばら売りのプリンと3 個パックのプリンが売られていることが世界知識として知られている場合、聞き手に「3 個のプリン」と言うときに、相手が認識上3 個入りのプリンということを自然に想像する。逆に「プリンを3 個」と発話するときに、相手がばら売りのプリンのことを想い浮かべる可能性がある。これは、談話の運用には話者のものの捉え方が反映する（加藤 2003 : 455）一方、聞き手が持っている知識を活用し、話者を理解しようとする姿勢も反映していると考えられる。もちろん、3 個入パックのプリンが存在していることを共有できていない相手に「3 個のプリン」を言うのは不適格である。その場合は、連用数量詞文を使ったほ

うが自然である。本稿は加藤（2003）の用語を援用し、特定数量詞、不特定数量詞、準特定数量詞の連体・連用用法を見ていく。

3.3. 準特定数量詞の位置づけ

日本語の数量詞の種類について、加藤（2003）は特定数量詞（1 個、3 匹）、不特定数量詞（すべて、たくさん）の二つに分けている。これについて、「数人」のようなものは触れられているが、具体的な分類は行われていない。一方で、田中〔秀〕（2011）は「数人」、「何人か」、「2、3 人」のような概数を表すものを概数詞と定義している。しかし、これら以外に「500 人前後」、「1 時間ばかり」などの表現も見られる。張（2024）は数量詞が照応性を持つか否かという点から出発し、さらに形態論の知見を借りて日本語の数量詞を細かく分類している。本稿は張の分類に基づいて数量詞の意味用法を整理する。

(26) ? 並んで走っていた数台のトラックがガードレールに三、四台ぶつかった⁶。

(井上 1978 : 175)

(26) について、田中〔秀〕（2011）は連体概数詞「数台」と遊離数量詞「三、四台」の比率関係では、当該遊離概数詞は「ほとんど」の意味で解釈されることになるが、座りが悪いと指摘している。「数日」、「数人」という場合の「数～」について、主な国語辞書も「3、4」「5、6」を中心に2～10 までさまざまな意味で捉えている。よって、(26) を「数台のトラックのうち三、四台が」に言い換えれば、数台の数値は三、四台より大であることがわかる。そうであれば、田中〔秀〕の主張の通り、比率関係を保っている限り、文としては成立する。(26) のような文は文法規則から逸脱しているとは言え、非文としない冗長性（語用論的な信頼性の原理に基づく）により、見過されているにすぎないと言えるだろう。この点について、加藤（2011）は、話し手は、解釈が可能で、かつ、妥当な解釈が存在する発話を行うと、聞き手は信頼していると説明している（語用論的信頼性の第一原則）。

本稿は、田中〔秀〕（2011）の「先行詞に「たくさん」のような連体数量詞が含まれる場合、遊離概数詞は比率的用法を獲得する⁷」という主張を認めたくて、準特定数量詞は、特定数量詞や不特定数量詞と意味用法が異なると考え、改めて準特定数量詞を一つの類として立てる。準特定数量詞の意味用法については第6 節で詳しく述べる。

4. 特定数量詞の構文について

特定数量詞とは、「1 個」、「2 冊」といった特定の数量を表し、照応性を持たないも

⁶ 疑問符は引用者によるもの。

⁷ 数量詞の比率的用法に関する詳細な記述は田中〔秀〕（2011）を参照されたい。

のである（張 2024）。このようなものが文に置かれるとき、どのような意味役割を果たすかについて、連体数量詞文と連用数量詞文に着目し分析する。

4.1. 特定数量詞と連体数量詞文

この節では、連体数量詞文における存在数量と非存在数量を表す特定数量詞の意味特徴を分析する。加藤（2003）は、日本語における連体修飾成分は必ず修飾される名詞に先行し、修飾される名詞の後ろに置くことは許されていないと述べている。もちろん、柔らかい表現や、くだけた表現が多い話し言葉においては、動詞の後ろに置かれる場合もある。

(27) 4人の友達を待っている。

(28) 6個の卵をください。

(29) クラスみんなで分けるようにと、15個のゼリーを渡された。

(27)～(29)の例文は全て特定数量詞が修飾語として後続する名詞を修飾するものである。本稿ではこのような構造を持つ文を連体数量詞文と呼ぶ。日本語記述文法研究会（編）（2009）によれば、名詞修飾型の数量構文は、動詞修飾型と添加型より幅広く成り立ち、述語や被限定名詞の格に強い制限はない。つまり、連体数量詞文は連用数量詞文と比較すると、前者のほうがより自由にほかの構文要素と結びつけることができる。

本稿は、存在数量が連体数量詞である場合は既定的単位あるいは集合の認知を表し、非存在数量が連体数量詞である場合は属性を表すという加藤（2003）の主張を認めたうえで、特定数量詞が連体数量詞文に置かれるときの意味特徴を検討する。まず、(27) (28) (29)を見ると、「4人」、「6個」、「15個」はそれぞれ「友達」、「卵」、「ゼリー」の存在数量を表している。(27)は友達の人数を指し、(28)は「卵」の個数を指し、(29)は同様に「ゼリー」の個数を表す。日本語記述文法研究会（編）（2009）によれば、「数量表現」の「名詞」が構文要素となり、一つの意味的なまとまりとして解釈される。このまとまりとしての解釈は、文脈に関わりなく文内で成り立つこともあり、談話の中でまとまりとして意識されることもある。例えば、(27)の「4人の友達」の場合には、発話者が事前に友達の情報を把握していない状況下で、いきなり「4人の友達」と発話すれば、文として不適切となる。つまり、「4人の友達を待っている」と発話する前に、発話者にとって、「4人の友達」を既に知っており、それを一つまとまった認識として活用されている。このようなことから、存在数量を表す特定数量詞は既定的単位と解釈することができる。

また、(28)は買い物している場面を想像しやすい。一般的に、スーパーで卵のほとんどは、4個や6個、10個入りにパック詰めされた形で売られているが、市場などでは、ばら売りの卵があってもおかしくはない。ばら売りの卵しかない市場で「6個の卵をください」を言うと、明らかに不適切である。それは聞き手にとって、パック入りであろうと袋入りであろうと、まとまった6個の卵が存在しないからである。この

場合では、連用数量詞文「卵を6個ください」のほうが適切である。要するに、話し手と聞き手の両方が「6個の卵」が存在するという情報を知っていれば、会話として成立するが、そうでなければ、情報が不完全、あるいは正しくないということで不適切となる。すなわち、加藤（2003）で指摘されているように、これは共有知識には集合的認知の根拠が存在しないからである。（29）も同様に、特定数量詞は準体助詞「の」を介して名詞「ゼリー」を修飾し、一種の集合として捉えられる。つまり、これも「既定的単位」と解釈できる。次に（30）～（32）を見る。

（30） 300 円の唐揚げを買った⁸。

（31） 100 ページの本を読んだ。

（32） 2500 cc の車を予約した。

「300 円」、「100 ページ」、「2500 cc」はそれぞれ被修飾名詞「唐揚げ」、「本」、「車」の前に現れ、それらの意味を限定している。（30）について、事前に唐揚げをグラムで計り、何グラムでいくらというような売り方であれば、金額や値段も存在数量として成立する。つまり、「300 円」は存在数量を表す。これに対して、本来「本」の存在数量は「冊」で表す（31）、「車」の存在数量は「台」で表す（32）は非存在数量となる。

したがって、非存在数量を表す特定数量詞（31）の「100 ページ」と存在数量を表す特定数量詞は文において同様の修飾位置に置くことが可能であるが、被修飾名詞の個数を限定しておらず、性質を修飾していることがわかる。これについて、加藤（2003）は奥津（1983）と同じ観点を取り、一種の「属性」と主張している。本稿も性質を修飾する点から、加藤と奥津の考えを認めたくえて、「属性」という用語を用いる。（31）の「100 ページ」は本の冊数でなく、その本の総頁数を指す。つまり、その本は 100 ページがあるということであり、そして、総頁数は 100 ページである本を読み切ったという意味になる。この場合では、連体数量詞文において、非存在数量を表す特定数量詞は属性を表す。また、非存在数量であるため、「既定的単位（連体修飾）」と「未定的単位（連用修飾）」の対立がなくなる。（32）もこれと同じであり、「2500 cc」は「車」の排気量を表し、一種の属性となる。しかし、「2500 cc」は動作の量を表すことができないため、「*車を 2500 cc 予約した」のように連用修飾ができない。

以上のことから、特定数量詞が連体数量詞文に置かれるとき、存在数量を表す場合は既定的単位を指し、非存在数量の場合は属性を指すことがわかる。

⁸ 存在数量を表すため、「唐揚げを 300 円買った」という連用修飾が成立し、未定的単位として解釈できる。しかし、通常「唐揚げを 300 円分買う」のほうが一般的であるため、連用修飾が成立しなくなる。そうなると、加藤（2003）で想定されている「既定的単位」と「未定的単位」は存在数量の連体修飾と連用修飾の対立があるということにより、連体修飾を既定的単位とすることができなくなる。

4.2. 特定数量詞と連用数量詞文

連体修飾と同様に、連用修飾の位置は修飾成分が被修飾要素に先行すると単純化できると加藤（2003）で述べられている。例えば、「このワンピースは高くて、とても買えない」のように、「とても」は副詞として後続する述語「買えない」を修飾することで、「とても」を連用修飾成分に解釈できる。日本語の連用修飾に関する問題は既に多くの研究者により分析されているが、関連する要因が多く存在するため、網羅的に分析し、それぞれの疑問点を明らかにすることは難しい。例えば、「このフィギュアはかなり高価だ」のように、「かなり」は程度を表す副詞であるが、「今夜、かなり走った」の「かなり」は程度を表しているのではなく、「走った」という動作の量を表していることがわかる。したがって、「かなり」という修飾成分の働きを説明するときには後行する被修飾要素を含めて考察しなければならない。さらに、「論文を5時間読んだ」の文において、「5時間」は名詞とは言うものの、動詞「読んだ」の前に置かれても不自然さを感じないということから、加藤（2003）で指摘されているように、連用修飾問題を検討するときには遊離数量詞が単独で連用修飾していると見える用法も考慮する必要がある。本稿は特定数量詞が連用数量詞文における意味用法を明らかにすることが目的であるため、今回はこのような現象が見られるという指摘にとどめることにする。

(33) 500 g の小麦粉を3袋買う。

(34) 外国語を学びたいなら、辞書を1冊購入したほうがいい。

本来であれば、小麦粉を数える体積の単位はグラム (g) である。しかし、(33) のように小売単位として、「袋 (ふくろ)」がよく用いられる。この場合は、特定数量詞「3袋」は先行する名詞「小麦粉」の存在数量を表す。(33) は異なるグラムで袋詰めされた小麦粉がたくさん置いてあり、その中から 500 g の小麦粉を3袋買うという意味となる。あるいは、500 g で袋詰めされた小麦粉が複数ある中から、3袋だけを買うという解釈もできる。つまり、たくさんのものから一部分を取ることになる。奥津 (1983) によれば、これは部分数量を表している。これに対して、3.2 節で述べたように、加藤 (2003) は有機的関連性を持たない複数の (あるいは一定量の) 存在と見る捉え方を離散的認知 (未定の単位) と指摘している。確かに、(33) では小麦粉の全体量を示す根拠がない。そのため、「3袋」は一定量となり、これは一種の未定の単位と言えるだろう。仮に、「300 g の小麦粉は5袋、500 g の小麦粉は3袋がある」という文脈があれば、「500 g の小麦粉を3袋買う」と発話するとやや不自然である。また、「3袋」が「買う」という動作動詞の前に置かれることから、買うという動作の量に解釈することもできる。つまり、存在数量を表す特定数量詞は連用数量詞文において、未定の単位を表しながら、同時に動作量も表している。

(34) について、辞書の数あるいは種類がたくさんあることを一般知識として発話者が知っているうえで、聞き手にアドバイスをしていると捉えることができる。つまり、不特定多数のものの中で一冊持ったほうがいいということであり、これも未定の単位

の一種である。そして、「1冊購入した」は動作量と見なせる。よって、存在数量を表す特定数量詞が連用数量詞文に置かれるときに、一般的に未定の単位を表すと同時に動作量も表していると言える。

次に非存在数量を表す場合に、特定数量詞はどのような意味役割を果たすかを考察していく。加藤（2003：448）は矢澤（1985）で提案された「達成量」を検討した結果として、非存在数量詞を含む文の場合、遊離数量詞は、動作や状態を結果として捉えた数量（これを《動作量》と称した）を表すと指摘している。しかし、常に遊離数量詞が《動作量》を表すのではなく、述部の性質にも影響を受けることがあると述べている。本稿は以下の例を用いて検証してみる。

- (35) 数量詞に関する本を4時間読んだ。
(36) 北大のメインストリートで15000歩歩いた。

「本」の数え方としては、普通「冊」を用いる。(35)の「4時間」は時間の長さを表すときに使用する単位であるため、非存在数量となる。後続する述語「読んだ」は動作動詞であり、つまり、(35)では本を読んだ時間の長さが4時間に達するということになる。この場合、特定数量詞は動作を行った時間量を表していると見なすことができ、一種の動作量と言える。また、(36)のストリートの存在数量は「歩」でなく、「本」である。つまり、「15000歩」は非存在数量である。これは動作動詞「歩く」に先行し、どのぐらい歩いたかという量についての質問への回答にもなる。すなわち、この場合の「15000歩」は動作量を指す。このように、非存在数量を表す特定数量詞が連用数量詞文に置かれるとき、一般的に動作量を表すことがわかる。言い換えれば、非存在数量を表す特定数量詞が動作量を表せない場合に、連用修飾ができず、連用数量詞文が成立できないことになる。

本節では、特定数量詞が連体数量詞文および連用数量詞文に置かれるときにどのような特徴を持ち、どのような意味役割を果たしているかについて考察を行った。結果として、一般に存在数量を表す特定数量詞が連体数量詞文に置かれるときに既定的単位を表し、連用数量詞文に置かれるときに未定の単位と動作量を表す。一方で、非存在数量詞を表す特定数量詞が連体数量詞文に置かれるときに、属性を表し、連用数量詞文においては、動作量を表す。

5. 不特定数量詞の構文について

仁田（2002）は日本語における副詞に焦点をあて、構文論的視点から特に動詞文を中心に、副詞的修飾成分を様々な下位分類化している。その中にある「かなり」、「少し」、「はは」といった程度副詞と「たくさん」、「いっぱい」といった量副詞を本稿では「不特定数量詞」と称する。不特定数量詞とは、「たくさん」、「少し」のような不特定の数量を表し、中には照応性を持つもの（例えば、全部、三分の一）と持たないもの（例えば、多く、大勢）がある（張 2024）。一般的に、不特定数量詞は連体数量詞構文

になりやすく、連用数量詞構文になりやすい傾向が見られる。この節では、不特定数量詞が連用・連体数量詞文において持つ意味用法を検討する。

5.1. 不特定数量詞と連体数量詞文

「たくさん」、「少し」、「かなり」といった不特定数量詞は物事の具体的な個数を表すことはできないが、存在数量を表せるものがある。

- (37) 大勢のファンが訪れている。
- (38) 空気中にたくさんの花粉が漂っている。
- (39) 引越し準備にはかなりの時間がかかった。

以上の連体数量詞文における「大勢」、「たくさん」、「かなり」は数の多寡を表していることがわかる。(37)はファンの人数、(38)は花粉の量、(39)は時間の長さを表している。(37)(38)は後接する名詞の数・量を表す点で共通している。(37)の「大勢」は概念的な多さにしかならないが、ファンという人間が存在している量を計ることができるため、本稿は一種の存在数量として扱いたい。そして、(38)の「花粉」は世の中にある全ての花粉を表しておらず、一部限定された空気中のことを指す。したがって、限定された範囲内の花粉の量が多いということになるため、これも存在数量としたい。存在数量を表す場合では、既定的単位として認める一方で、(39)の時間の長さも存在数量と言にくいいため、これを一種の属性として扱う。

また、前述したように、日本語における不特定数量詞は一般的に連体数量詞文になりにくい。例えば、以下の例である。

- (40) *ほぼの栗を食べた。

不特定数量詞の中で、大半のものは副詞として使用されており、同時に名詞のような性質を持つものは少ない。複数の品詞にまたがっているものとして、「少し」、「たくさん」、「かなり」、「大勢」のほか、「多く」もあるが、「多く」は形容詞「多い」の連用形であるため、名詞というカテゴリーに入れることができるかについて検討の余地がある。本稿は、「毎年、多くの観光客が訪れてくる」のように、名詞のような振る舞いをすることから、連用形から派生した名詞であると考ええる。

5.2. 不特定数量詞と連用数量詞文

不特定数量詞は連用数量詞文になりやすい傾向が見られると説明したが、以下の場合では、連用数量詞文としても適格性が劣っていると言える。

- (41) ?栗をほぼ食べた。

「ほぼ」は全部あるいは完全ではないが、それに近い状態であることを意味する。

「ほぼ」は極限値の存在を意味する句を修飾する（北原 2013）。また、「ほぼほぼ」⁹のような疊語¹⁰も存在し、意味的には「ほぼ」を強調した言い方であり、数量や程度が極めて完全に近い様子を表すと考えられる。(41)の「栗」の量を把握することができないため、「ほぼ」を用いるとやや不自然である。しかし、「昨日買った栗をほぼ食べた」という文に置き換えると、「栗」が「昨日買った」という連体修飾節に限定され、「ほぼ」が全体量を表すことができるため、自然な文となる。このような現象が見られるのは栗の総量と食べた量の比率が成立していないことが原因であると考えられる。つまり、修飾成分によって、ある程度の範囲を限定すれば、不特定数量詞の不適切さがなくなるわけである。

- (42) 今日はたくさん歩いたね。
(43) 今日はいっぱい話したね。
(44) 庭にバラがたくさん咲いた。
(45) 学生がパーティーにいっぱいやってきた。 （以上、高見・久野 2006：129）

(42)(43)の非存在数量詞「たくさん」、「いっぱい」は、動作動詞「歩く」、「話す」をそれぞれ修飾し、歩いたり話した量が多いことを示しているが、(44)(45)の「たくさん」、「いっぱい」は、先行する名詞「バラ」、「学生」を修飾し、バラや学生の数が多いことを表している。つまり、「たくさん」、「いっぱい」が(42)(43)では「動詞(句)修飾」、(44)(45)では「名詞(句)修飾」となっている（高見・久野 2006）。前者の用法を「副詞的用法」、後者の用法を「数量詞的用法」とし、日本語記述文法研究会（編）（2009）は「動きの量を限定するもの」と「名詞の数量を限定するもの」と定義している。さらに、量を表す副詞的成分は、動き動詞や存在動詞と共起し、性質を表す語や、存在動詞以外の状態を表す語とは共起しにくいと記述している。しかし、動き動詞や存在動詞と共起すれば、必ず量を表す副詞的成分として成立できるか、あるいは自然な文となるかは問題となる。

- (46) 図書館の資料は市民の皆さまの財産です。最近、利用した本をそのままにされることが多く（？たくさん）あります。 （BCCWJ）

「多く」は量を表す副詞的成分とは言え、ここでは名詞の数量を限定しているもので

⁹ 野口（2016）では、「ほぼほぼ」をビジネスの世界で誕生した新疊語として分析している。

¹⁰ 疊語とは、語構成論の観点からいえば、同一形態素や同一単語をかさねることによってできた合成語である。もともとは語を感情的に強めるため、くりかえされたのであろうが、それが固定して一語と意識されるようになったものである。子供のことばや詩などの文学作品に多くみられる。『日本語文法事典（安藤正次 1935）：303』。

はなく、ある動作の「頻度」を表していると想定できるため、「たくさん」に置き換えると不自然になるとわかる。もう少し例を挙げて考察する。

- (47) ごはんを少し食べた。
- (48) 昨日は天気がよかったので、街中をかなり走った。
- (49) 東京には観光客が大勢いる。
- (50) 盆栽がすべて枯れた。

(47)(48)の「食べる」、「走る」は動作動詞である。不特定数量詞「少し」、「かなり」はそれぞれ「ごはんの量」、「歩数あるいは時間の長さ」の多寡を表している。ごはんというものが存在する量を計ることができるため、花粉と同じように、「少し」を存在数量と見なすが、具体的な数量がわからないということもあり、未定の単位として扱いたい。(48)は非存在数量を表す特定数量詞と同様に、動作の量を表しており、「動作量」の一種と言える。(49)の「いる」は典型的な存在動詞であり、形式上から不特定数量詞「大勢」は「いる」を修飾していると捉えられ、この場合では「観光客」を表す存在数量と解釈しても構わないと考えられる。しかし、実質的に「大勢」は先行する名詞「観光客」の数を限定しているように見えるが、具体的な量ではないことがわかる。そのため、本稿ではこのように連用数量詞文における存在数量を表す不特定数量詞は未定の単位を表すと判断する。(50)も(49)と同じく、「すべて」は状態動詞「枯れる」を修飾しているように見えるが、実は先行する名詞「盆栽」の量を表している。この場合は、動作量と解釈できないが、一種の存在数量(盆栽の数量)と言えよう。つまり、全体が一つにまとまっていない集合体(未定の単位)となる。

以上のように、不特定数量詞の中にも存在数量と非存在数量を表すものがある。概念的な多さ少なさにしかならない存在数量を表す不特定数量詞が連体・連用数量詞文において、既定の単位と未定の単位を表すことがわかった。そして、先行する名詞や述部との関わりから動作量を表すこともある。一方で、連体数量詞文における非存在数量を表す不特定数量詞は属性を表し、連用数量詞文の場合では、動作量を表す。

6. 準特定数量詞の構文について

準特定数量詞は、特定数量詞・不特定数量詞と異なり、確定な数量を表すことができないが、不特定数量詞より明確である。そして、副助詞などの要素を付けることで、数量を曖昧化することができ、使用自由度が上がる。張(2024)は、特定の数量を表せず、一定の幅を有しており、照応性を持たないものを準特定数量詞と定義している。これは主に、副詞、副助詞、名詞によって修飾される準特定の数量を表すものであり、下位分類として7種類〔副詞＋数量詞〕型、〔数＋助数詞〕型、〔数量詞＋副助詞〕型、〔数量詞＋名詞〕型、〔副詞＋数量詞＋副助詞・名詞〕型、〔数詞の疑問詞＋か〕型、〔概数数量詞〕型を提案している。本節は張の分類を踏まえて、準特定数量詞の連体・連用数量詞文における意味用法を明らかにする。

また、上述でわかるように、存在数量あるいは非存在数量を表す場合、特定数量詞と不特定数量詞の表す量が異なるにもかかわらず、連体・連用数量詞文において表す意味用法がほぼ同じである。そのため、本節では準特定数量詞の場合も特定数量詞と同じような意味用法を持っているという仮説を立て、以下で検証してみたい。

6.1. 準特定数量詞と連体数量詞文

準特定数量詞は連体数量詞文を構成するとき、特定数量詞と不特定数量詞と同様に、修飾する名詞を先行する。具体例を以下に示す。

(51) 庭の植木に3～5匹のスズメバチが毎日うろうろしている。

(52) 約8kgのお米を購入した。

「スズメバチ」の個数は「匹」であるため、「3～5匹」という準特定数量詞は存在数量を表している。(51)のスズメバチの数量は正確に分からないが、「3～5匹」が後接する名詞「スズメバチ」を限定しているため、その数の範囲を把握することができる。要するに、発話者は「3～5匹」というスズメバチの数を既に把握していることから、一つのまとまった集合体と考えられ、特定数量詞のように、集合的認知あるいは既定の単位を表すと判断できる。(52)も同じく存在数量を表すと言える。日本で米は一般的に袋詰めされて売られているほうが多いが、中国では米は計り売りのほうが一般的である。そのため、袋詰めの場合は、「kg」より「袋」という単位のほうが相応しく、計り売りの場合は、「kg」が適切である。つまり(52)の例では、副詞「約」が付いているとは言え、存在数量を表すことに変わりはない。そして、この場合では、「約8kg」も一種の既定の単位として認められる。

(53) 日本にいたとき、彼は4～6畳の部屋に住んでいた。

(54) 昨日は土曜日だったので、妹は家で200～300ページの本を読んでいた。

『数え方の辞典(飯田 2004)』によれば、部屋を数えるとき、ホテルや旅館の部屋は「室」で数え、ふすまや障子で仕切った部屋の数には「間」で数える。会話などでは(つ)も用いる¹¹。つまり、ここの「4～6畳」は部屋の存在数量ではなく、非存在数量になる。そして、前述したように、「本」の存在数量は「冊」であるため、(54)の「200～300ページ」も非存在数量を表す。さらに、先行する準特定数量詞は部屋の大きさや頁数を表していることで、その被修飾名詞の属性を表していることがわかる。

以上から、連体数量詞文において存在数量を表す準特定数量詞がほぼ特定・不特定数量詞と同じような意味役割を果たし、存在数量詞の場合は既定単位を表し、非存在

¹¹ また、部屋の数え方としては、「一部屋」、「二部屋」もある。これらの数量詞の用法について、田中(2019, 2022)を参照されたい。

数量の場合には属性を表す。

6.2. 準特定数量詞と連用数量詞文

加藤 (2003) は「数件」、「数本」について、統辞的な振る舞いを見ると、特定数量詞に似ている点が多いと指摘している。前節で分析した結果から、連体数量詞文に置かれる準特定数量詞と特定数量詞の意味役割はほとんど同じであることがわかる。この節では連用数量詞文を中心に考察していく。

- (55) 昔住んでいた村の風景画が数枚壁に掛かっている。
- (56) 太郎は居酒屋を数軒飲み倒している。
- (57) 庭の植木にスズメバチが4～6匹毎日うろうろしている。
- (58) 次回のセミナーにはうちの社員が20～30人来るらしい。
- (59) 昨日は土曜日だったので、家で小説を1冊読んでいた。

(55)～(59)における準特定数量詞は動詞に先行し、副詞のように述部を修飾しているように見える。「数枚」、「数軒」、「4～6匹」、「20～30人」は特定の数量を表せないが、「いくつあるか」に対する数量の回答になっていることで、存在数量を表すと言える。(55)では、修飾節によって「村」が限定されるが、「風景画」を限定しているわけではない。つまり、「風景画」はどのくらいあるか、文脈などを通じてその全体量を指し示さない限り、未確定の情報となり、一種の未知的単位と判断できる。そうすると、全体量が分からない風景画の中の数枚が壁にかかっていることが想定できる。この場合、「数枚」は一定量と見なされ、離散的認知とも言える。すなわち、存在数量を表す準特定数量詞が連用数量詞文に置かれるときに、特定数量詞と同じように離散的認知、あるいは未定の単位を表す。(56)の「数軒」も同様である。(57) (51) のスズメバチの数量は同じであるが、これまでの分析を考え合わせると、連体数量詞文の名詞句「3～5匹のスズメバチ」は限定されており、定になる。一方で、連用数量詞文の「スズメバチが4～6匹」は限定されておらず、不定になる。また、(55)～(58)の述部で用いられる動詞は動作動詞でないため、動作量を表すことができないが、(59)では、「読んでいた」という動作の量を同時に表せる。この点から、連用数量詞文において動作量を表すかどうかは述部に出現する動詞の種類と深い関係を持っていることがわかる。また、連用数量詞文において非存在数量を表す準特定数量詞は適格であるものとそうでないものがある。

- (60) 太郎はレポートを4～6時間書いた¹²。
- (61) *おじさんは足袋を十一、二文はく。

¹² 「*太郎は4～6時間のレポートを書いた」という連体数量詞文に置き換える場合、属性を表すのではなく、非文になる。

一般的に、(60)の先行名詞「レポート」を課題と見なす場合に対応する存在数量を表す単位は「本」である。つまり、「4～6時間」は「レポート」の非存在数量となる。準特定数量詞が後ろの動作動詞「書く」を修飾すると同時に、レポートを書くための稼働時間を表している。したがって、この場合は典型的な動作量になる。これに対して、(61)の「十一、二文」も非存在数量を表すが、(60)と異なって非文である。「おじさんは十一、二文の足袋をはく」のように、連体修飾できるが、これは「十一、二文」が属性を表すからである。つまり、連用修飾できないのは、「十一、二文」は「はく」という動作の量を表していないためである。

以上のことから、存在数量を表す準特定数量詞が連体数量詞文である場合は、既定的単位を表し、非存在数量を表す準特定数量詞が属性を表す。一方で、連用数量詞文の場合は、存在数量の準特定数量詞は一般に未知的単位・動作量を表し、非存在数量の準特定数量詞は動作量しか表せないことがわかる。したがって、準特定数量詞の場合も特定数量詞と同じような意味用法を持っているという仮説は成立する。

6.3. 複数の異なる数量詞を持つ文

「四つの中から一つを選ぶ」のように、日本語において、複数の数量詞が同時に現れることができる。これについて、井上 (1978) は数量詞が定名詞句の前後に現れる可能性もあると指摘している。

(62) ? 並んで走っていた数台のトラックがガードレールに三、四台ぶつかった。

(63) ? 彼は積んであったたくさんのみかん箱を路上に二、三個投げ捨てた。

(64) ? 手すりに止まっていたたくさんの雀が数羽チュツチュと鳴いた。

(以上、井上 1978 : 175)¹³

井上は変形規則が存在しないという主張を裏付ける根拠の一つとして定名詞句の例を取り上げている。数量詞が名詞句に先行する位置にも名詞句外の位置にもあらわれ、「*数台の三、四台のトラック」、「*たくさんの二、三個のみかん箱」、「*たくさんの数羽の雀」が言えないことから、どのみち、数量詞を両方の位置に生成しなければならないことを示している、と述べている。しかし、3.3節で説明したように、「数台のトラックのうち三、四台が」、「たくさんのみかん箱のうち二、三個が」、「たくさんの雀のうち数羽が」に書き換えれば、数量詞が片方の位置に生成できるということになる。本稿は数量詞遊離を認めない立場を取るため、変形規則や数量詞遊離に関する議論をしないことにする。ここで、複数の異なる数量詞が同時に文の中に現れるときに、どのような制約を受け、そしてどのような順番で並べるかという問題について考

¹³ 筆者が数人の日本語母語話者に確認した結果、適切な文とは判断できないということとで、「？」を付けることにした。そして、これらを疑非文として扱っている研究も見られる (田中 2011 など)。

察したい。

赤楚 (2005) は「三、四台」のようなものを概数数量と定義しており、張 (2024) では概数数量詞の下位分類として二つの数詞が連続している数量詞を A 型としている。(62) は前後に準特定数量詞で構成される文となる。一方で、(63) (64) では、不特定数量詞が名詞に先行し、準特定数量詞が述部を修飾することになる。(62) を観察すると、「数台」で表している数が「三、四台」より多いと想定できる。つまり、「数台のトラックの中の三、四台がぶつかった」という意味に解釈できる。よって、同じ数量詞が同時に出現するとき、数の多いほうが先に現れる傾向があると考えられる。(63) (64) において、不特定数量詞が被修飾名詞の前に現れ、準特定数量詞が述部の前に現れている。同じことであるが、「たくさんのみかん箱の中の二、三個」、「たくさんの雀の中の数羽」と解釈できる。つまり、後ろに現れる数量は前の限定されている数量の部分数量を表しており、前に現れる数量 > 後ろに現れる数量ということになる。また、大なりではない場合でも文として成立することもある。例えば、(63) の準特定数量詞を全数の表す不特定数量詞「全部」に置き換えると、「積んであったたくさんのみかん箱を路上に全部投げ捨てた」という文は成立する。これは「全部」が照応性を持っており、前後の数量が同じになるからである。よって、前述の大小関係結論を修正すると、前に現れる数量 $\geq$ 後ろに現れる数量という結果が得られる。

(65) ? 昨日、畑で取った数個のスイカを 2、3 個叔父に送った。

(66) 昨日、畑で取ったたくさんのスイカを全部叔父に送った。

(67) * 昨日、畑で取ったたくさんのスイカを 3 個叔父に送った。

さらに、後方の数量詞を特定数量詞に置き換えると、(67) のように非文となる。これについて、赤楚 (2005) は VP 内に現れる概数数量詞は動詞 (「行為」) を強調することが主要機能であり、数量的情報を示す機能は副次的なものである。これに対して、基数数量詞 (本稿の特定数量詞) は数量的情報を与えることが主要機能であると主張している。この考えを裏付ける例を以下に提示する。

(68) 花子は積んであったたくさんのみかん箱を $\left\{ \begin{array}{c} *3 \text{ 個} \\ 2, 3 \text{ 個} \end{array} \right\}$ 投げ捨てた。
(赤楚 2005 : 71)

赤楚 (2003) では「試し～みた」という文法要素を用いて検証が行われたが、管見では、不特定数量詞と特定数量詞の両方が同時に先行する名詞句の数量情報を修飾すると、両方が同時に名詞句の数量を限定し、共に絶対的な数量を表すことになる。そのため、矛盾が生じることによって、特定数量詞の場合が不適格になる。つまり、(67) のような文は非文となる。また、加藤 (2006) は数量詞の動作量を考察するにあたって、「X 冊の課題図書を Y 冊読んだ」の場合に、 $X \geq Y$ という制約を前提に課すだけであると指摘している。

- (69) 6冊の課題図書を4冊読む。 (加藤 2006 : 27)
- (70) 6冊の課題図書を全部読む。
- (71) 6冊の課題図書を少し読む。
- (72) * 6冊の課題図書を7冊読む。
- (73) ? 4冊の課題図書を数冊読む。

(69)～(72)の例から観察できるように、前に現れる数量詞は同じであるものの、後ろに現れる数量詞¹⁴はそれより多くなると、文としては不適格になる。しかし、(73)のように文としては自然であるかどうかは人の評価に大きく関わっているものがある。「数冊」という準特定数量詞が表す範囲は人によって異なることがあり、一般的に若者は「二、三冊」と考えているようであるが、五六十年代の人は「五、六冊」と考えているようである。そうすると、「二、三冊」の場合は問題がないのに対して、「五、六冊」のほうが不可能になる。また、加藤(2006)は「 $X \geq Y$ 」の相等数量について、特に触れていないが、(70)を見ると、全称数量を表す不特定数量詞が文に置かれても不自然ではない。このことから、不特定数量詞はほかの数量詞より自由度が高いと言える。

したがって、特定数量詞(前に出る)と不特定数量詞(後ろに出る)より構成される単文において、不特定数量詞は全称数量を表すものであればほぼ制約を受けず、そうでなければ、前者の特定数量詞より小でなければならない。準特定数量詞が後に出る場合も同じである。また、不特定数量詞と準特定数量詞が同時に現れるとき、前者が後者より大きいものを取らなければならないが、個人差により判断しにくいものもある。

7. まとめと今後の課題

本研究は、基本的に加藤(2003)で提案された概念を引き継いで、日本語における特定数量詞・不特定数量詞・準特定数量詞という三種類の数量詞がそれぞれ連体・連用数量詞文における意味用法を詳しく考察した。その結果、両文において、三種類の数量詞の意味機能が非常に似ていることが明らかになった。さらに、複数の異なる数量詞により構成される文において、数量詞が表す数量の大小という制約を受けることがわかった。

以上の結論は、加藤(2003)によって明らかにされたことから大きく出るものではない。ただ、本稿では、これまで指摘されてこなかった不特定数量詞と準特定数量詞を加え、三種類の数量詞の意味的な類似性を検証したことは従来の数量詞研究において、初めてである。また、加藤(2003)との異なる点として、存在数量詞を表す各数量詞が連用数量詞文において、未定の単位でありながらも動作量を表すことを示し

¹⁴ 加藤(2006)は、前者を連体数量詞、後者を連用数量詞と称している。

た¹⁵。加藤（2003：467）で示された表を以下のように修正する。

(1) 存在数量を表す場合

・ 特定数量詞	連体数量詞文	既定的単位
・ 不特定数量詞	連用数量詞文	未定の単位・動作量
・ 準特定数量詞		

(2) 非存在数量を表す場合

・ 特定数量詞	連体数量詞文	属性
・ 不特定数量詞	連用数量詞文	動作量
・ 準特定数量詞		

したがって、各種類の数量詞の分析によって、加藤（2003）が提案した概念を裏付ける根拠の一つとなり、従来の研究においても新たな進歩をもたらしたことに、本稿の意義を主張したい。なお、数量詞が動作量を表すときに、述部に出現する動詞と深い関わりを持っており、今後、より厳密な分析を目指すため、アスペクトとの関係から論じていきたい。

【参考文献】

- 赤楚治之（2005）「日本語における概数数量詞の Q-float について」『日本語文法』第 5 巻 2 号、pp.57-73
- 井上和子（1978）『日本語の文法規則』東京大修館書店
- 奥津敬一郎（1969）「数量的表現の文法」『日本語教育』14 号、pp.42-60
- 奥津敬一郎（1983）「数量詞移動再論」『人文学報』160 号、pp.1-23
- 神尾昭雄（1977）「数量詞のシンタックス」『月刊言語』6 巻 8 号、pp.83-91
- 加藤重広（1997）「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26、pp.31-64
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 加藤重広（2006）「日本語の数量詞文と動作量解釈」『言語研究の射程湯川恭敏先生記念論集』pp.23-42、ひつじ書房
- 加藤重広（2011）「世界知識と解釈的文脈の理論：ネオ・グライス語用論の再構築」『北海道大学文学研究科紀要』第 134 号、pp.69-96
- 北原博雄（2013）「程度修飾とアスペクト現象についてのスケール意味論的研究」『国語学研究』52 号、pp.29-43

¹⁵ 加藤（2006）は連用数量詞文と動作量との関係を中心に議論したが、未定の単位と動作量が同時に表すことについて触れていない。

- 高見健一・久野暉（2006）『日本語機能的構文研究』大修館書店
- 田中佑（2019）「名詞「路線」の助数詞への用法拡張 ―数量詞の意味的機能の観点から―」『日本語文法』19 巻 2 号、pp.35-50
- 田中佑（2022）「名詞「試合」の助数詞への用法拡張」『日本語文法』22 巻 2 号、pp. 20-36
- 田中秀毅（2011）「日本語における概数詞の遊離文について」『日本語文法』第 11 巻 1 号、pp.139-156
- 張琴琴（2024）「現代日本語における数量詞の分類について」『北海道大学大学院文学 院 研究論集』第 23 号、pp.283-302
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2』くろしお出版
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』（新日本語文法選書）くろしお出版
- 野口恵子（2016）『「ほほほほ」「いまいま」?! クイズ おかしな日本語』光文社
- 矢澤真人（1985）「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期 大学紀要』23、pp.96-112

【辞書類】

- 飯田朝子（編）（2004）『数え方の辞典』小学館
- 金田一春彦、林大、柴田武（編）（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
- 日本語文法学会（編）（2014）『日本語文法辞典』大修館書店

【謝辞】

本稿は、北海道大学国語国文学会令和 5 年度大会（於北海道大学）における口頭発表の内容を加筆修正したものである。発表の席うへでご助言を賜りました先生方に御礼申し上げる。そして、本稿を作成するにあたっては、指導教員の加藤重広先生および 2 名の査読の先生方から貴重なアドバイスをいただいた。厚く御礼申し上げる。本稿の内容の不備や誤りはすべて筆者の責任である。

（ちょう きんきん・北海道大学大学院博士後期課程）